

ジャック・ロッシ氏講演会について

97年6月6日東大本郷キャンパスにおいてジャック・ロッシ氏を迎えた講演会が催された。当年88歳という氏は青年期から共産主義思想に身を投じ、37年から24年間にも及ぶソヴィエトでの収容所生活を経た後、現在は貴重な体験を基にパリ郊外で執筆活動に従事している（氏についての詳細は『ラーゲリ詳解事典』『さまざまな生の断片』を参照されたい）。講演会直前に降り出した急激な雨にもかかわらず、事前の広報が功を奏したのか熱心な聴衆によって席が埋め尽くされ、立ち見の出るほどであった。今回の来日は氏の著作の日本語版が出版されたことを機になされたものであり、また講演に関してはあらかじめ「共産主義の運命」という仮題が用意されていたが、氏の個性に初めて触れる者にも政治思想に深い理解を持ち合わせない者にとっても平明で共感しやすい内容であるよう配慮して話が進められた。氏はその講演の始まりにおいて、いかなる主義に対してもクレームをつけることはしないという自らの姿勢を言明した上で、共産主義を信奉する革命家としての前半生における活動と37年の逮捕後体験したソヴィエトロシアにおける生活について、機知を交えながら聴衆に物語った。そしてその中で生じた氏の共産主義に対する見解の変遷、そして氏なりのソヴィエトロシア観を明らかにした。その知識は、個々の具体的事例が豊富だっただけでなく、深い教養に裏打ちされていた点でも大変に興味深いものであった。そして講演後は聴衆から熱心な質問がよせられ、やむを得ずそれらの一部は割愛せざるを得ないほどの盛況を呈した。

講演会終了後にはロッシ氏を囲んで内輪の懇談会が企画されていたが、熱気冷めやらぬ聴衆の一部はその席にも参加した。氏はタイトな来日スケジュールと長時間にわたった講演の疲労をおして、快く聴衆との交流の場に出席してくださった。氏の経歴は余人には全く想像のつかない波瀾万丈ぶりであるが、講演中にも垣間見られた氏の人物の大きさがその席上ではより身近に感じられた。そして氏のくぐり抜けてきたであろう苦難の跡を残さない柔和な人柄と、対照的におよそ底しれなく感じられる内面とには全く敬服させられるばかりであった。懇談の席上、実のところ参加者同士の議論が白熱したあまりその場の雰囲気が一瞬騒然とする事態が出来たのであったが、その際鶴の一声で満座の注目を掌握し、空気を和ませたのは氏であり、そこでもやはり人物の奥行きの高さがうかがわれた。

この講演会に関して印象的であったことは、何よりロッシ氏という講演者の特異な個性とそうした人物をスラヴ科という枠組みの中で紹介することになった巡り合わせの不思議さとであった。そのことは彼の講演を聞きに集まった聴衆の中には本郷と駒場においてスラヴ研究に携わる研究者や学生ばかりでなく、関心を持つ広く一般の人々が多く含まれていたことから明らかであろう。また特に懇談会の席でスラヴとは専攻分野を異にする大学院生によって発せられた、スラヴ科によるこうした取り組みへの好意的発言は大変感動的でした。しかしそれは通俗に墮してしまうことの危険も認識しつつ、研究が社会から乖離するのではなくいかに社会に働きかけていくべきかについて考えさせられる一言でもあった。そしてまたこの講演会全体を通じて、ロッシ氏のような存在を社会に紹介する場を提供し得る、先人達の積み重ねてきたスラヴ研究の豊かさと、次世代として担うべきその遺産の重責を痛感させられた。（田中記）